日本天文学会早川幸男基金渡航報告書

2004 年 12 月 10 日採択

申請者氏名	**早川基金 (会員番号 4233)**
連絡先住所	〒 606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学
所属機関	宇宙物理学教室
職あるいは学年 (年齢)	M2
電子メイル	kobayasi@kusastro.kyoto-u.ac.jp
渡航目的	研究集会での口頭発表
講演・観測・研究題目	Lyα Line Spectra of the First Galaxies: the Effect of Aspherical Deceleration of the H I Halo
渡航先 (期間)	オーストリア (2005 年 2 月 12 日〜2 月 20 日)

今回私は、2005 年 2 月 13 日（日）〜19 日（土）までオーストリアのオーバーグーグルにて開催された SISCO (Spectroscopic and Imaging Surveys for COsmology) 主催の国際研究集会 “Surveying the Universe” に参加し、口頭発表を行ないました。参加人数は 100 人弱、J. Peebles や J. Peacock 等著名な宇宙物理学者による lecture が 19、学生による口頭発表が 24、ポスターが 9 人と、winterschool 的な色合いの強い研究集会でした。

私の発表のタイトルは “Lyα Line Spectra of the First Galaxies: the Effect of Aspherical Deceleration of the H I Halo”。既に ApJ にて出版されている私の研究をさらに発展させたもので、現在 ApJL に投稿中の研究内容の発表です。私の発表は初日の “Theory: Setting the Scene” というタイトルのセッションで、予定の上ではあの J. Peebles と S. White による lectures の後に行われることになっていました。しかし、J. Peebles の飛行機の遅れにより急遽予定が変更され、S. White が最初に、続いて私ということになりました。いずれにせよ、本研究集会における学生発表としては最初の発表でした。私にとっては初の国際研究集会での不慣れな英語での発表、しかもあの S. White の後ということでものすごい緊張していました。ちなみに本研究集会に参加していた日本人は私一人で、開催期間中は英語のみの生活を余儀なくされました。ところで、私の名前は正和 (Masakazu) なのですが、自分でも早口では言いづらい名前で、外国の方にまともに呼ばれた例がありません。それにまつわる話として、私の発表の初めに、アメリカの Universal Studios Hollywood に行って ET のアトラクション “E.T. adventure” に乗った際の話をしたところ、これが非常にウケました。ということで、私の名前は気楽に “Masa” か論文著者名 “MARK” で呼んでくださいと言って、自己紹介を終えました。続いて研究の背景、研究手法、結果を簡潔に話し、15 分弱の発表を summarize で締めくくりました。

発表準備の段階で、話すことは全て覚えておこうと発表用原稿を作り、何度も練習しました。しかし実際の発表では、緊張のあまりか頭が空っぽになり、原稿を手に持っての発表をしてしまいました。この他にも、発表後に他の方から指摘されたのですが、結果がなぜそうなるのかという物理的定性的な説明をしなかったということもあり、反省の多い発表でした。しかし、周囲の評価はなぜだか分からないほど高く、中には私の発表が一番面白く印象に残っていると話す方もいました。研究集会開催期間中、食事や休憩の祭に話す人全てが、“Hi, Masa” とか “Hi, MARK” と言って私の名前を覚えていてくれました。中には難しいと言われたから敢えて “Masakazu” と呼ぼうとがんばって間違えまくっている方もいました。開催期間中、私が自分の名前を言って、“I know” と言われなかったのは、私の発表時にはまだ会場に到着していなかった数人だけでした。

発表の感想に関しても、いろんな方から、「一番大事なのは自分の名前を覚えてもらう発表をすることだが、それができていない Ph.D. の学生はたくさんいる。キミは名前を覚えさせることができて、しかもまだマスターの学生なのだから、最高の発表だった」、「私の学生にもああいう発表をしろといういい見本になった」、「研究内容も非常に簡潔に伝えていて、何が大事なのかよく分かった」という最高の誉め言葉をいただくことができました。原稿を見ながらの発表はその成果を考えれば全然気に病むことはないとも言っていただけました。英語の発音も、きちんと通じるものだったようです。数人の方とは研究内容に関して議論を交わし、論文を読みたいと興味を持っていただくこともできました。

研究集会には SISCO のメンバーであるヨーロッパの学生がほとんどで、中には英語があまり得意でない学生もいましたが、ほとんどが非常に流暢な英語を話していました。しかし、私があまり英語の聞き取りや話すのが得意でないことが分かると、ゆっくり話してくれたり、こちらの表現しようとすることを汲み取ってくれ、非常に良い英語の listening & speaking の練習にもなりました。

この研究集会に向かう際は、ものすごい不安と恐怖といった方が近い感覚が主でしたが、今では、自分の名前を覚えてもらうことができ、研究内容にも興味を持っていただけて、さらには英語の listening & speaking の練習にもなる最高の体験ができたと感じています。最後になりましたが、私の海外渡航を援助下さった早川幸男基金とその関係者の方々に深く感謝いたします。今回の渡航で得られた経験や知識を今後の研究に活かしていこうと思います。

小林正和 （京都大学理学部宇宙物理学教室）